

第1回校内授業研究実施

キー・コンピテンシーを育む向東型授業の開発

～『葛藤場面』の設定を通して～

去る6月23日に、向東小学校では中学校と合同で校内授業研を実施しました。本年度から研究構想、研究主題が新たなものになり、それらを共通理解するための授業でした（研究内容の詳細は、「研究だより1号」をご参照ください）。

授業は、第6学年理科「月と太陽」で実施しました。子供達は、事前に地球の自転と太陽の位置との関係。そして、月と太陽の位置関係によって、月がどのように見えるか、また、それらがどのような周期で変動するのかを事前に学習します（右写真）。



そして本時では、日本で夕方に見える半月（上弦の月）は、同じ日の他の国ではどのように見えるかということ子供達は追究しました。対象はほぼ地球の真反対のアメリカと、ほぼ同じ経度ではあるが南半球にあるオーストラリアです。子供達は、アメリカとオーストラリアそれぞれの国の夕方に、月がどう見えるのかを、地球のモデル（バランスボール）や月のモデル（発泡スチロール球）を使ってああでもない、こうでもない意見と交わしながら追究することができました。



特に、南半球のオーストラリアから見える月の形は子供達にとって難しかったようです。そのせいか、予想の段階では、随分意見が分かれました。しかし、どう見ればよいかグループごとの探究で分かるにつれ、だんだん、意見がまとまっていきます。その後、子供達は「ほらこっちから見るとこう見えるでしょ」と見え方を教えながら、お互いに納得する姿が見られました。



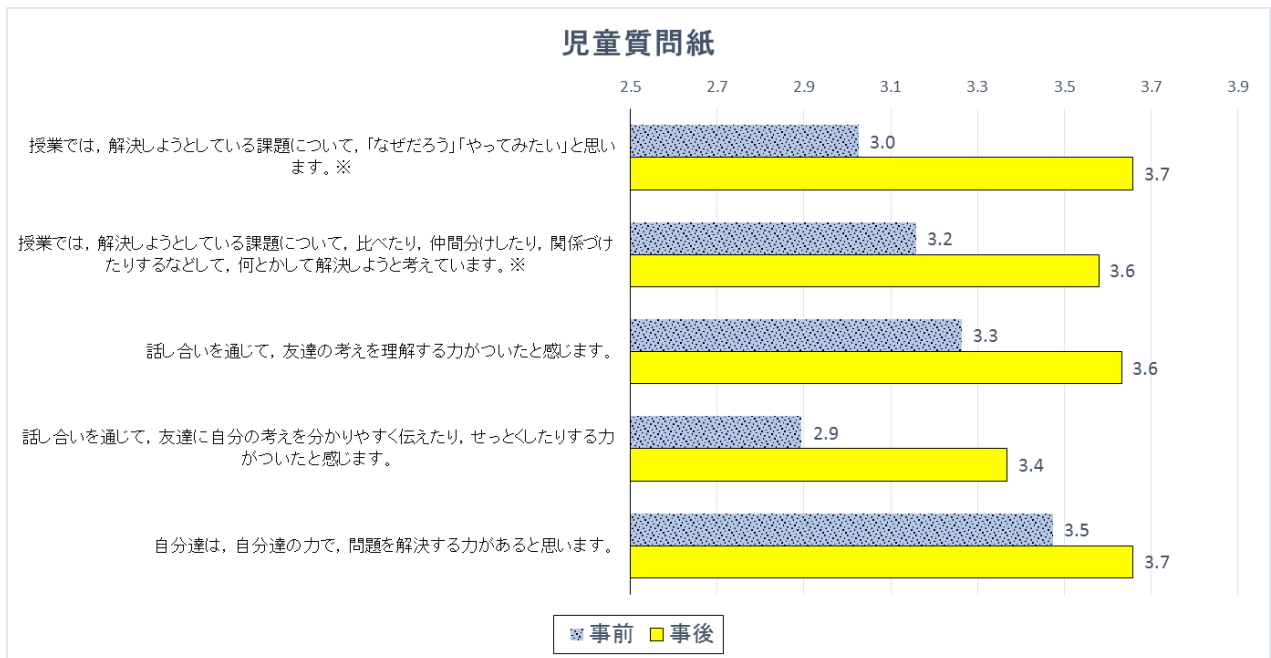
さて、研究授業後は、早稲田大学教授 向後 千春先生から、本時の授業や現在求められている授業像などについての講義がありました。特に、その学習自体がもつ将来見据え子供達に習得してほしいねらい「エッセンシャルクエスション」、そして、それらの学びを可能にする「インストラクショナルデザイン」、その他、様々な内容について、向東小中教員が学ぶことができました。



さて、授業後の子供達の変容についてです。調査は4件法による質問紙で行い、授業前後の評定平均値の変容を比較しました。質問項目は以下の5つです。

- 質問1「授業では、解決しようとしている課題について、「なぜだろう」「やってみよう」と思います。」
- 質問2「授業では、解決しようとしている課題について、比べたり、仲間分けしたり、関係づけたりするなどして、何とかして解決しようと考えています。」
- 質問3「話し合いを通じて、友達の考えを理解する力がついたと感じます。」
- 質問4「話し合いを通じて、友達に自分の考えを分かりやすく伝えたり、説得したりする力がついたと感じます。」
- 質問5「自分達は、自分達の力で、問題を解決する力があると思います。」

そして、下のグラフが調査結果です。



いずれの項目も、評定平均値が上昇していることが分かります（※印は尾道市共通の質問項目）。その他、記述式の問題においても、空間的な理解を示している回答が数多くありました。

しかしながら、記述式の問題の中において誤答がいくつか見られたことや、上のグラフの「**質問5：自分達は、自分達の力で、問題を解決する力があると思います。**」だけ、他の質問項目より変容幅が少ないことから、全ての子供に「確実に理解させることができた」、あるいは「問題解決できたと感じさせることができた」とはいえず、そのことについて課題が残ったともいえます。

今後は、今回の研修をもとに、それぞれが、葛藤場面を含んだ「キー・コンピテンシーを育む」授業を開発することになっています。子供達が、より主体的、意欲的に問題発見し、多様な意見が存在する中で、問題解決を協働的に行っていくような授業開発を進めていきたいと思っています。それぞれが開発授業については、また、研究便りでご紹介したいと思います。